社団法人　電子情報通信学会
THE INSTITUTE OF ELECTRONICS,
INFORMATION AND COMMUNICATION ENGINEERS

信学技報
TECHNICAL REPORT OF IEICE.

[特別講演]　ここに注意しよう日本人の口頭英語

金谷　健一†

† 岡山大学工学部情報工学科

あらまし　先端技術は世界に発信して初めて意味があるが，日本人の国際会議における英語による発表がまずいために国際的に評価されないことがしばしば起こる．研究発表だけでなく，機内，空港，ショッピング，および人との挨拶で日本人の言語挙動がおかしく，外国人から奇異に思われることが多いが，多くの日本人は気がついていない．これを指摘するとともに，日本人が間違えやすい発音やアクセントの要領を示す．

キーワード　英語会話，口頭発表，日本人の英語，英語の発音，英語のアクセント

Tutorial: Advice on Oral English for Japanese Speakers

Kenichi KANATANI†

† Department of Information Technology, Okayama University, Okayama, 700-8530 Japan

Abstract　Advanced technologies have meaning only when it is disseminated all over the world. However, Japanese technologies are sometimes not sufficiently appreciated because of poor presentations in English at international conferences. Beside research presentations, the linguistic habits, including greetings, of Japanese in such places as airplanes, airports, shops and stores are often very odd for natives, but most Japanese are not aware of this. This article points this out and also shows the gist of correct English pronunciations and accents.

Key words　English conversation, oral English, Japanese English, English pronunciation, English accent.

1.　基本的な会話

まず会話の基本，特に多くの日本人が誤解していることを取り上げる．国際会議に出かけると，論文発表だけでなく，外国の先生と挨拶したり，空港や町で買い物をする．このとき，日本人のしゃべる英語は非常に奇異である．例を挙げよう．

1.1　ものを注文するとき

機内で飲み物をサービスしている乗務員が Would you like tea or coffee?と聞く．私の経験では 100%の日本人が Tea あるいは Coffee と答える．これを聞くたびに私は身の毛がよだつ思いがする．ネイティブがそのように言っているのを聞いたことがない．

私が外国のファーストフード店で何かを買い，カウンターを離れる．背後で次の客が店員から声を掛けられたらしく，One hamburger という声が聞こえる．私はあまりの意外さにドキッとして振り向くと案の定日本人である．こんなことを言うのは日本人しかいない．私は外国に行く度にこんな場面に何度も遭遇してやり切れない思いである．

もちろん初めの例では Tea, please または Coffee, please が正しい．後の例では One hamburger, please が正しい．ものを依頼したり注文するには please をつけるということは中学校の英語で習う（フランスでは s'il vous plait，ドイツでは bitte）．センター試験にも出る．だから 100%の日本人が知っている．そして全員，外国で please をつけずに人を驚かしている．相手は笑顔で応対するかもしれないが，周りの人が聞いて不自然である．なぜ please が出ないのか．

1.2　ものを受け取ったとき

初めの例で乗務員がコーヒーをついだとする．100%の日本人がそれを飲む．後の例では 100%の日本人がハンバーガーを持ってカウンターを去る．日本人が外国で評判を落とすのも無理はない．ネイティブがどうしているかを見ればすぐわかる．しかし日本人は何も知らずに楽しそうで，私は絶望的になる．

もちろん，どちらの場合も Thank you と言わなければならない（フランスでは Merci，ドイツでは Danke）．日本人は Thank you は好意に感謝する言葉と勘違いしている．だから店員に感謝する必要などない（感謝されるのは客だ）と思い込んでいる．しかし，Thank you は感謝というより「取引の終了の合図」である．ものを受け取って Thank you というのは「これが私の望むものです．確

かに頂きました」という確認である．言わないのは「さらに欲しいものがある」，または「これは私の望むものでない」という意味になる．だから店員は次に何を言われるか思わず緊張する．Thank you と言われて初めて次の人の応対に移れる．

論文発表でも最後に Thank you (for your attention) という．これは聴衆に感謝しているのではなく,「これで私の発表は終わりです」という合図である．聴衆はこれを聞いて初めて拍手ができる．Thank you がないと，次にまだ何か言うのかと身構えてしまう．

ものを受け取ったとき（=取引が終了したとき）Thank you と言うことも中学校で習う．実際，機内で乗務員とネイティブの次のような会話をよく聞く．

A: Would you like tea or coffee?
B: Tea, please.
A: Here you are.
B: Thank you.
A: You are welcome.

センター試験にもこのような例が出る．それでもほぼ 100%の日本人が please や thank you と言えないのはなぜか．

1.3 買い物をするとき

スーパーで買い物をする．商品を持ってレジで並ぶ．前の人が済んで，自分の番である．100%の日本人が商品を置き，店員が金額を計算してくれるのを待つ．私は外国で何度もこのシーンに遭遇していやな思いをする．

現地の人は必ず Hello（フランスでは Bonjour，ドイツでは Guten Tag）と声を掛けている．日本人は知り合いでもないのにといぶかしく思うが，これは挨拶というより「さあ，私の番ですよ」という合図である．スーパーでなくても，店で商品を持ってカウンターに行くと，まず Hello と言う．これは「さあ，私が買い物をしますよ」という合図である．

空港の出入国のカウンタでも同様である．係官より先に Hello と声を掛けるのがよい．Hello は「はい，私の番ですよ」という合図とともに「私は英語で話しますよ」という意思表示の意味もあるので，必ず英語で答えてくれる（試しに Bonjour と言うとフランス語が，Guten Tag というとドイツ語が返ってきた）．日本人は何も言わずにじっと待っているから，慣れた係官は英語の話せない日本人と推察して「コンニチハ」と日本語で話しかけることもある．そして，それを聞いた日本人は喜んでいる．

1.4 言語の役割

これまでの例から，国内で礼儀正しい（会ったときにお辞儀をする）ことで知られている日本人が外国で相手国の目にいかに礼儀知らずに映るか想像できる．この理由は日本との習慣の違い（店では客は無言で通し，店員のみが形式的にしゃべり続けるなど）とともに，please = 好意を依頼，thank you = 感謝の気持ち，hello = 親愛の挨拶，などという英語の誤った理解である．

言語はコミュニケーションの道具であり，コミュニケーションの代表が「取り引き」である．取り引きの言葉は「意味」より，その「役割」が本質である．辞書の意味に引きずられてはならない．その取り引きを実行する合図は何か，これはその国の人が何と言っているかを聞き，それを真似ればよい．

私も若いときにアメリカで，世話をしてくれたアメリカ人の先生と買い物に同行したとき，どこの店でもまず店員に Hello と声をかけていたので，この先生はこんなに多くの店で店員と馴染みになっているのかと驚いたものである．今から思うと笑い話であるが，未だにその衝撃が記憶に残っている．

1.5 挨拶の仕方

今度は挨拶である．国際会議に出かけ，ホテルに泊まり，朝，朝食にホテルのレストランへ行くと，知り合いのスミス教授がいた．さあ何と挨拶するか．

たいていの日本人は，朝だから当然 Good morning だと思う．確かに何も言わないよりはマシだが，これでは挨拶になっていない．

これは英語会話（フランス語でもドイツ語でも同じ）の最初のレッスンで必ず習う．この場合は（スミス教授が自分より相当年配だとして）Good morning, Professor Smith と言って初めて挨拶になる．年があまり離れていない場合はファーストネームで Good morning, John などという(注1)．すると向こうも Good morning, Kenichi など返事をする(注2)．

(注1)：英米では学生も先生をファーストネームで呼ぶことが多いが，これを嫌う先生もいて，私の知人は不平を言っていた．このため学生が人によって使い分けることもある．ある学生は私に日本ではファーストネームで呼ばれるのかと尋ね，日本では使われないと答えると，以後私への呼びかけは（メールをよこすときも）Professor Kanatani となった．先生に対する本来の呼びかけは Sir であるが，今日では皮肉ととられる（Kingsley Amis の小説に先生を Sir で呼びかける奇妙な学生の話が出てくる）．

(注2)：Kenichi ではケニチと読めるから，ケンイチと読ませるために Ken-ichi とハイフンを入れよと勧める誤解（神話？）があるようだ（誰が言い出したのか？）．これは全く無意味であり，ハイフンがあってもなくても英語としての発音は同じである．目的を達せないどころか外国人に無用の混乱を引き起こし，このハイフンは何か，ichi がセカンドネームか，などと問われ，返答に窮する.「ケンイチと読ませるためだ」と答えても，ケンイチと読めないから答になっていない．ケンイチと読ませるには Keng-ichi と g まで入れる．この g は無音であり，中国人の姓「王 (Wang)」をワンと読むのと同じである．こうすれば間違いなく日本人の読むケンイチと同じ発音をしてくれる（実際，日本人も無意識にこの無音の g を発声している）．ただし，このスペルで我慢できればの話である．その他，Ota ではオタと読めるからオータと読ませるために Ohta と書く，Sato ではサトと読めるからサトウと読ませるために Satoh と書くなどの外国人を混乱させる無駄な努力が多い（むろん英語の発音はそのようなつづりの変化に影響されない）．日本

このように名前を含めて初めて挨拶になる(注3)，というより，むしろ名前を呼び合うことに意味があるのだ．名前をつけないで単に Good morning と言うと，先に述べたように店や事務所で午前中に「もし」,「どなたかいますか」,「はい，私の番です」などの Hello と同じ合図になる．午後なら Good afternoon，夕方なら Good evening を用いる（それに対して Hello は時間帯に無関係）．

しかし，名前を呼び合っても実はまだ挨拶が完了していない．必ず次に何か「一言」言わなければならない．それを言って初めて挨拶が完了する．それは中学校の教科書にも書いてある．センター試験にも出る．

最も標準的なのは教科書通りの How are you?（答えは Fine, thank you. And you?）であり，くだけた表現では How are you doing?ともいう．It is a beautiful day, isn't it?のような天候の話題でもよい．ホテルの朝の一言で使用頻度が高いのは Did you have a good sleep yesterday? だろう．私もこのように言われたことが数多くあった．最近では言われる前に私から言い出すように心掛けている．

重要なことは，Good morning, Xxxxxx に続けて何か一言をセットにしたものが「挨拶」だということであり，これを言い交わしたら後は好きなように談話に入ればよい．しかし，ほとんどの日本人は Good morning の部分だけが挨拶で，その後は談話だと誤解しているから，相手から一方的に何かを言われ，Yes, Yes と答え続け，喜んでいる．

1.6 日本人から見た外国人

以上のように，外国での日本人の言語挙動がいかに非常識かを述べたが，逆も成り立ち，日本での（特に少し日本語をかじった）外国人の言語挙動は日本人から見て非常識なところが多い．例えば店でもどこでも「コンニチワ」,「ドウモアリガトウゴザイマス」を連発して奇異な印象を与える．

私がある英国人と食事に行ったとき，店員が品物を持ってくる度に習い覚えた「ドウモ」,「ドウモ」と言うので，私は彼に日本では何も言わなくてもよいとたしなめたことがある．彼は非常に驚いていた．

もちろん外国ではウェイターが何かを持ってくる度に Thank you というのが礼儀であると同時に,「はい，これは私が注文したものに間違いありません，確かに受け取りました」という確認の合図でもある．Thank you と言わないとウェイターが内心で何か問題があったかと心配になるであろう．

一方，日本語の「（どうも）ありがとう（ございます）」は感謝と恐縮の意味しかない．このため「すみません」や「申し訳ない」にも等置できる．確認するには黙ってうなずくしかない．

私の研究室にいるスペインの留学生は私に会うと,「オハヨウゴザイマス，カナタニセンセイ」,「ハイ，カナタニセンセイ」,「アリガトウゴザイマス，カナタニセンセイ」などと「カナタニセンセイ」を連発されて閉口する．日本では相手に向かってそのように名前を添えないのだと言いたいが，母国での習慣は抜けないであろう．だから，逆に日本人が外国で名前を添えるべきところに何もつけないのも外国人にとっては,（別に感情を悪化させないが）奇異な印象を与える．

1.7 日本人の非常識の本質

そうである．今述べた「奇異な言語挙動でも，問題を生じたり感情を悪化させるまでには至らない」ことが事態の改善を阻害する最大の要因である．外国に行って来た日本人は「こう言って通じなかった」,「こう言ってトラブルになった」,「こう言うべきであった」という失敗談，反省談をよく自慢げに話す．もちろん，一度失敗したことは二度と繰り返さない．人間は失敗から学ぶ動物である．

しかし，hello, please, thank you が言えなくても，自分に失敗した，まずかった，という意識がないから永久に学習できない．そもそも日本人の最大の関心は「英語の理解と伝達」である．相手が何を言っているのかわからない，こう言いたいが英語でどう言えばよいかわからない．だから英語を勉強する．そして

- 相手の言うことが完全にわかる．
- 自分の言いたいことは何でも英語で言える．

というレベルに到達する（このレベルに到達した日本人は非常に多い）．そして，次のようなコミュニケーションが成立する．

（1） 相手が何か言うと，それを瞬時に対応する日本語として理解できる．

（2） それに対して日本式の適切な応答ができる．

（3） それ（のみ）を瞬時に英語で言える．

これが一瞬にできるのが「英語の達人」であり，すべての日本人はこの境地に到達しようとして英語を勉強する．だからこれまで指摘した基本会話は，いかに多くの教科書や教材で取り上げようと，センター試験に出ようと，決して自分の口からは出ない．そのような基本会話を聞くと理解できることに喜びを感じるが，それはテレビドラマを見るような第三者意識であり，自分が言う必要を感じない．なぜなら，自分は “自分で言いたいこと”（そしてそれのみ）を英語で言えるからである．

結局，言語機能が英語化しても思考回路が日本式のままだから，いつまでも背広を着て下駄を履いているような違和感が残る．この問題はもはや言語学習の問題を超えているので，たぶん解決できないであろう．そのかわり，やがて世界中の人に「日本人はそういう言い方をす

人が英語の発音に弱いのもこのような無知が関係しているのであろう．

(注3)：名前を知らない人には Sir, Madam などをつけるが，英語はフランス語，ドイツ語ほどではない．

るのだ」ということが知れ渡り，もはや誰も奇異に感じなくなる，そういう日が来るであろう．

2. 英語のアクセント

次に英語のアクセントを取り上げる．国際会議の発表では英語がおかしくても意味が通じればよいし，英語国（英，米，加，豪）生まれ以外は皆なまりがあるから気にする必要はないという考えもある．確かに若手はあまり神経質にならずに積極的に英語を使い慣れることが大切であるが，それでも聞きやすい英語で話すと研究の評価や説得力にプラスになる．

ただ，英語国に 10 年以上暮らしている先生方でも誤ったアクセントがなかなか直らないことを見ると，これは自覚しなければ決して進歩しないようである．前節に取り上げた挨拶と同様に,「正しくなくても困らない」ことが進歩を妨げている．ここではそれを克服するための知識をまとめる．

2.1 日本語のアクセント

外国人がなまりがあるのは，ネイティブが最初から正しい音を覚えるのに対して（地方や階級によっては “正しい” か疑問の場合もあるが），外国人は無意識にまず母国語の音律を用いるためである．そこで日本人はまず日本語の音律を知ることから始めなければならない．

日本語の音律は多くの日本人は知らないが（学校で教えないから），外国人向け日本語教本や放送アナウンサーの訓練マニュアルなどに詳しく書いてある．日本語アクセント辞典も市販されている．

日本語（標準語）は２段階の高低アクセントからなり，次の３パタンのいずれかである．

I. 高|低 · · · 低
II. 低|高 · · · 高
III 低|高 · · · 高|低 · · · 低

上下の線は高低を表す．· · · は一定の高さが保持される．このパタンは**第１音節と第２音節で高さが変化する**という特徴がある．だから耳で聞いて単語と単語の区切りが識別できる．つまり，平坦にタンゴトタンゴノクギリガシキベツデキルというと単語と単語の区切りが識別できないが，タ|ンゴト|タ|ンゴノ|ク |ギリ|ガシ|キベツ|デ|キ|ル というから単語と単語の区切りが識別できる．

2.2 英語の発声パタン

英語は各単語の冒頭が高く始まり，ある音節で急速に降下し，直後に反発して次の単語の始まりの高音とつながる．辞書ではその急速に降下する母音の上に ´ が付けられ，**アクセントの音節**と呼ばれる．

しかし日本人は (かなり) 高い音から話し出すのが苦手で，どうしても遠慮がちに低い音から始めるので，その時点でもう自然な英語にならない．低い音から始めると必然的に高い音に上げなければならないが，英語にはこのような**上昇パタンが存在しない**．この，上昇し，そのまま高さを持続させるのは日本人特有であり，日本人の耳に心地よく響くが，英語としては不自然に聞こえる．

比喩的にいうと英語はピアノであるのに対して日本語（および日本式英語）はオルガンである．ピアノは指を鍵盤に降り下ろした瞬間に音が響き，指を跳ね上げた後に余韻が残る．それに対してオルガンは指で鍵盤を押している間のみ音が持続する．

日本人は英語にあり得ない上昇パタンで話しながら，自分は流暢に話していると思い込んでいる．それを聞く日本人も,「あの人は英語がすらすら喋れる」と感心する．これが不自然に聞こえたらヒアリングは既に日本人の域を越えている．

2.3 日本語のアクセント移動

日本語の音律にはもう一つ著しい特徴がある．例えば「ビデオ」は ビ|デオ だが，その後に「画像」を続けると ビ|デオガ|ゾウ となり，ビ|デオ → ビ|デオ と下降音が上昇音に反転する．すなわち，日本語アクセントの 3 パタンの I 型が**次の単語と結び付くと II 型に反転する**．これが日本語の**アクセント移動**と呼ばれる現象である．

これは日本語に美しい響きを与える機能であり，外国人の日本語が不自然なのはこの習得が難しいからである．しかし，これを英語に適用すると極めて不自然な響きになる．にもかかわらず多くの日本人は無意識にこれを適用し，しかも日本人同士が聞くと心地よく聞こえる．

だから日本人は video image, computer vision, image processing のような 2 単語からなる名詞は必ず前の単語を上昇パタンで発音する．この癖は前置詞 (句) でも生じる．例えば日本人は by を単独の語としては全員正しく発音できる．しかし by ∼ と何かが来ると，1 音節の by を無理に分割して バ|イ と上昇音にする．through ∼, during ∼, using ∼ などすべて上昇音になる．

これを日本人の注意すると，多くの人は意外な顔をして,「そのほうが “自然” ではないですか」と反論する．そのようなパタンは英語に存在しないが，音声は先入観があると自分が信じているように聞こえるので，これを自力で発見することは相当困難である．

2.4 外来語のアクセント移動

私には理由がわからないが，英語をカタカナ読みにするときに，日本人はアクセントのパタンを変えることが多い．

第 1 音節にアクセントがある英単語は日本語音としては I 型に近いが，アクセントを後方に移動させて II 型に発音することが多い．例：álphabet → ア|ルファベッ|ト，ásterisk → ア|ステリ|スク，hístogram → ヒ|ストグ|ラム．

これを「日本人にとって冒頭のアクセントは発音しにく

いから」とは解釈できない．なぜなら，逆に後にアクセントのある英単語のアクセントを冒頭に移動させてI型に発音することがあるからである．例：adréss → ア|ドレス，facsímile → ファ|クシミリ，Endéavor → エ|ンデバー（スペースシャトルの名前），consént → コ|ンセント．

なぜ原音に逆らったパタンに反転するのか，私の想像では外来語だということを強調するために（そのほうが外国語らしく聞こえると思い）原語にない冒頭アクセントにするのではなかろうか．逆に，明らかに外来語であるものは，それが外来語であることを目立たせないように（生意気に聞こえないように）原語からアクセントの位置をずらすのではないだろうか．

2.5 日本人が間違えやすいアクセント

日本人が国際会議でアクセントを間違える筆頭はíntegrate であろう．私の経験では 99.99%の日本人が integráte と発音している．これは「積分する」という意味で理論研究によく現れるが（積分記号 ∫ はíntegral），異分野の知識や複数の手法を「統合する」という意味で応用研究でも盛んに用いられている．

先入観は恐ろしいもので，発表後の質疑でネイティブが “How do you íntegrate them?” と聞いているのに “We integráte them by ...” などと答えている．英語が “音” として聞こえないので，永久に気がつかない．

冒頭アクセントの動詞は，日本人にとってアクセントが後ろにあるほうが “英語らしい” と感じるようである．同様のことがéstimate, cálculate, fórmulate, símulate, óscillate, fáscinate, súbstitute, cónstitute, órganize, súmmarize, fórmalize などでも起きる．∼ate, ∼ute, ∼ize の形の動詞に間違いが起きやすい．

2.6 日本人が間違えやすい wa の音

アクセントではないが，日本人が国際会議で間違える筆頭は wa(r) の音である．war（戦争）はウォーでありワーではない．warm（暖かい）はウォームであるワームではない．wall（壁）はウォールでありワールではない．walk（歩く）はウォークでありワークではない．このように古くから日本語として定着した外来語は正しい音を保存している．明治の先人はするどい耳を持っていたのであろう．

しかし最近はローマ字に引きずられて war = ワーと表記し，それが活字として氾濫するので，日本人のほとんどが正しく発音できなくなっている．例：Warner brothers（ウォーナーブラザーズ，×ワーナーブラザーズ），warp（ウォープ，×ワープ），award（アウォード，×アワード），warning（ウォーニング，×ワーニング）．ゲームや漫画にも「時空のワープ」などが出てくる．このためネイティブが正しい音で問いかけても，先入観のために気づくことはない．

wa∼ も同様であり．古いものは正しく「ウォ」と表記されていた．人名の Walter はウォルター（×ワルター），Walt Disney はウォルト・ディズニー（×ワルト・ディズニー）である．want（欲しい）のウォント（×ワント），watch（時計）のウォッチ（×ワッチ），wash（洗う）のウォシュ（×ワッシュ）も正しい．

しかし人名の Washington（ウォシントン，×ワシントン），Watson（ウォトソン，×ワトソン），Watt（ウォット，×ワット）は誤っている．だから「入れ換える」の swap（スウォップ，×スワップ），「保証」の warrant（ウォラント，×ワラント），「白鳥」の swan（スウォン，×スワン），「ワルツ」の waltz（ウォルツ，×ワルツ）なども正しく発音できない(注4)．

誰がスワップなどと言い出したのだろう．部活にワンダーフォーゲル部というのがあるが（語源はドイツ語），「さまよう」は wander（ウォンダー）であり，ワンダーというと不思議に思う（wonder）．

2.7 その他のポイント

それ以外でよく気になるのは，日本人がよく cónsequence（結果），cónsequently（ゆえに）をコン|シー|クエンス，コン|シー|クエントリー と発音する癖である．séquence（列）の発音に引きずられたのであろうが，アクセントは冒頭にある．また sequ の部分は軽くシクまたはセクと発音する．同様に súbsequence（続き），súbsequently（続いて）も日本人は サブ|シー|クエンス，サブ |シー|クエントリー と発音する癖がある．

どうも日本人はíntegrate も同様に，冒頭アクセントの単語が苦手のようだ．また冒頭アクセントではないが，represénト（表す）の冒頭の re ははっきりとレと発音しなければならないのに，ほとんどの日本人は リプリ|ゼ|ント と言っている．

また ∼ate で終わる語は動詞なら [∼eit] と発音されるが，名詞や形容詞なら [∼ət] となる．軽く「イット」といえばよい．しかし多くの日本人が「エイト」と発音している．例：「正確な」accurate [ǽkjurət]（アキュリット，×アキュレイト），「推定値」estimate [éstəmət]（エスティミット，×エスティメイト），「親密な」intimate [íntəmət]（インティミット，×インティメイト），「情熱的な」passionate [pǽʃənət]（パッショニット，×パッショネイト）．

これまで述べた日本人の誤りはすべて思い違いから生じているので，ネイティブの発表をよく聞いて，「おや，

(注4)：辞書には swan [swɑn | swɔn] のような発音記号が書いてある．前が米音で後が英音であり，多少響きが異なる．しかし [ɑ] も [ɔ] も日本語のアやオより口の中を大きく開け，音はオに近い．これは wa に限らず，例えば not も同じであり，[nɑt | nɔt] である．日本語よりずっと口を大きく開けながら「ノット」と言えばよい．日本語のアは口をあまり開けないから，日本語式に「ナット」というと nut [nʌt]（豆）になってしまう．発音記号 [ɑ] の字面に引きずられてはならない．

自分の発音と違うな」と感じるたびに辞書の発音記号で確かめるのがよい．

しかし，自分の発音と違うことに気づくことは非常に困難であり，相当の経験を要する．だから，いったん間違った発音を覚えてしまうと後で直すのは難しい（日本語の方言を改めようとしても改まらないのに似ている）．そこで，論文を読んで知らない単語が出てきたら，辞書で意味を調べるだけでなく発音記号も見て，正しい読み方を覚えることが大切である（多くの日本人は意味さえわかればよいと，発音を無視しているようだ）．

3. 英語の発音

最後に個々の母音と子音の発音を取り上げる．発音で最も大切なのは「区別」である．例えば日本人の苦手な l と r の発音の仕方は英国と米国で多少違うし，地域や人によって異なる．しかし両者が混同されることはない．「正しい l と r の音」というものは存在せず，必要なのは**誰が聞いても両者が区別できる**ことである．

例えて言えば，歌を歌うとき歌手と同じ（絶対）音程を出す必要はない．相対的な音程が同じなら「同じメロディー」である．男女や人によって出せる声が違うから，音程を同じにせよというのは不可能であり，それをするのは物まね芸人の仕事である．

しかし，学校の英語の授業で先生はネイティブのテープを聞かせ，生徒に「そのまま真似るように」と強要する．だから日本人は英語が発音できない．ネイティブと「同じ」音でなくても，**音の種類とそれらの区別を仕方**を学べば十分である．

3.1 広い母音と狭い母音の区別

日本語の母音はアイウエオの５個しかないが，英語ではそれぞれに口の開け方が「広い」音と「狭い」音の２種類（アは例外で３種類）と，それらを組合せた二重母音がある(注5)．

ア の 音

「広いア」は口の中を広げて発音する．art の音がそうであり，辞書には [ɑ:] という発音記号が書いてある．この [:] を日本人は「伸ばす記号」と誤解しているが(注6)，急いで話せば短く，ゆっくり話せば長くなるから，伸ばす伸ばさないで音は区別されない．そうではなく，[:] があるとないとで音そのものが違う．[ɑ:] はアの響きが「広い音」（あくびをするような音）である

「狭いア」は口をあまり空けないで発音する．but の音がそうであり，辞書には [ʌ] または [ə] と書いてある(注7)．日本人が無意識にアというと普通はこの音になる．

アにはもう一つ「平らなア」がある．これは口の中を極端に狭く，かつ横に広げて発音する．hat の音がそうである．辞書には [æ] という発音記号が書いてあり，日本語のアとエの中間に聞こえる．日本人には苦手な音で，「狭いア」で代用しがちである．そのため hat のつもりが hut になることが多い．

イ の 音

「広いイ」は唇をそのままにして口の中を広げて発音する．hit の音がそうである．辞書には [i] という発音記号が書いてあり，日本語のイとエの中間に聞こえる．

「狭いイ」は口の中を狭め，唇を横に引いて発音する．heat の音がそうであり，辞書には [i:] という発音記号が書いてある．これも日本人は「イを伸ばす」と誤解しているが，長短は関係なく(注8)，hit と heat ではイの響きが違う．音の長さは話す調子で変わるのであり，自分は長さで区別したつもりでもネイティブは音質で区別するから区別になっていない．

ウ の 音

「広いウ」は唇をそのままにして口の中を広げて発音する．pull の音がそうである．辞書には [u] という発音記号が書いてあり，日本語のウとオの中間に聞こえる．

「狭いウ」は口の中を狭め，唇をすぼめて前に突き出して発音する．pool の音がそうであり，辞書には [u:] という発音記号が書いてある．これも「ウを伸ばした音」ではない．pull と pool ではウの響きが違う．

エ の 音

「広いエ」は唇をそのままにして口の中を広げて発音する．fairy の音がそうである．辞書には [ɛ] または [ɛə] という発音記号が書いてある．

「狭いエ」は口の中を狭め，唇を横に引いて発音する．ferry の音がそうであり，辞書には [e] という発音記号が書いてある．

日本人は fairy と ferry はエの後に弱いアがあるかないかで区別するが（確かに [ɛ] の後には弱い [ə] が続く傾向にある），実際にはエの響きが違う．だたし，この区別

(注5)：「広い」,「狭い」は便宜上の用語で，正式な音声学用語ではない．厳密には英語の母音にここに挙げたもの以外に３重母音やその他の変種もあるが，これだけを理解していれば十分である．フランス語やドイツ語では母音にイとウの中間音など５種類以上あるが，英語はアイウエオの５種類であり,「広い音」と「狭い音」の区別さえできれば他の言語より習得しやすい．

(注6)：[:] は伸ばすことを表すのではなく，それと合わせて一つの音を表す．例えば [ɑ] と [ɑ:]，[i] と [i:]，[u] と [u:] はそれぞれ異なる母音である．[:] を用いるのは，それらが “多くの場合やや長めに発音される傾向があること” と，異なる母音ごとに別の記号を用いると（音声学者によってはそうしている）記号が煩雑になるからである．これが日本人の英語の学習に非常にマイナスになっている．

(注7)：[ʌ] と [ə] は強く言うか弱く言うかの違いで，意識して区別する必要はない．このため同じ記号を用いる音声学者もいる．

(注8)：長短を左右する要素の一つは次に有声子音が来るか（または何も来ない），無声子音が来るかである．同じ [i] でも hit よりも hid のほうが長めであり，同じ [i:] でも heat よりも heed のほうが長めである．したがって hid の [i] が heat の [i:] よりも長いこともある．[u] と [u:] でも同じである．

が問題になる場面はまれで，日本人は特に区別する必要はない（このため発音記号を区別しない辞書もある）．

オ の 音

「広いオ」は口の中を広げて発音する．not の音がそうであり，辞書には [ɑ|ɔ] という発音記号が書いてある．前者が米音，後者が英音であり，響きがかなり違うが，どちらにしても日本語のオとアの中間に聞こえる ([ʌ] とは違う意味で)．日本人にとって [ɑ] と [ɔ] を区別する必要はなく，それ以外の母音 (特に「狭いオ」) と区別することが重要である．

「狭いオ」は口の中を狭め，唇を丸めて発音する．note の音がそうであり，辞書には [ou] という発音記号が書いてある．これを日本人は「オの後にウが来る音」と誤解している．確かにウの響きで終るが，このウは非常に弱く，聞こえないことが多い．そうではなくて冒頭のオの響きが [ɔ] と [o] では違う．

実際の場面で重要なのは [ɔ:] と [ou] の区別である(注9)．bought ↔ boat, caught ↔ coat, naught ↔ note, Paul ↔ pole などすべてオの響きで区別されるが，日本人は同じオの音を出すので，その後にウがあってもなくてもネイティブには聞いて区別できない（仕方なく文脈で判断する）．国際会議ではほとんどの日本人が because [bkɔ:z] を [bikouz] と発音しているようだ．

母音のまとめ

要するに，**区別しなくてよいものは気にしない，区別すべきものははっきり区別する**ということである．母音はアイウエオの各々に広い音と狭い音があり，アに平らな音があるが，エは広い音と狭い音を区別する必要がないから，合計 10 個の母音が区別できればよい．

多くの日本人は 5 個の母音しか区別できず，それを伸ばしたり，弱いウをつけてたりして，自分では 10 種類にしたつもりでいるが，ネイティブが聞くと 5 種類である．10 個の母音を発音できることが英語の発音の最初のステップである．

3.2 子音の発音

l と r の区別

私が日本人の英語発表を聞いた限りでは，l のほうが問題が多いようである．グラフの説明などの line ⟨線⟩ がよく Rhine ⟨ライン川⟩ に聞こえる．l は唇をそのままにして口の中を狭くし，口をやや横に広げる感じで舌を上歯の裏につけて，力を込めて明るいルの音を出す(注10)．

一方，r は口をやや丸め，口の中を広げ，舌をそらせ (あるいは丸め)，ウに近い暗いルの音を出す．日本人が l を意識せず，いい加減にルというと（人にもよるが）r に近い音が出やすい．

th の 発 音

多くの日本人の th が s または z に聞こえる．例えば theme と seem の違いは，seem がくいしばった歯の間からスーと息が漏れるのに対して，theme は歯の間に舌を入れてその息の漏れを止め，それでもかすかに息が漏れる，それが th の音である．これは非常に弱い音である．どうしてもできなければ（積極的には勧められないが）弱い f の発音で代用してもよい．s で代用するよりよっぽど th に聞こえる．this, them などの有声音の場合も同じであり，z の音を舌で止める感覚である．

s と sh の区別

日本人全部が苦手というわけではないが，例えば see [si:] と she [ʃi:] の区別ができない人が意外に多い．しかし soup [su:p] や shoot [ʃ:t] は正しく発音できる．これはカタカナでス，シュと表記が異なることからわかるように，日本語としても異なる音である．問題は i が続く場合であり，日本語表記は両方ともシである．しかし区別はそれほど難しくない．スとシュの後半のウをイに変えればよい．そして s は口を横に引き，sh は唇を丸めて発音すればよい．

f と v の発音

これも一部の日本人は苦手のようである．上歯で下唇を噛んで発音するという説明もあるが，実際には上歯を下唇の裏に軽く当てる感じであり，その隙間から息だけ出してかすれた音を出すのが f であり，声を加えたものが v である．

v の音は b の音と似ているが，b の音は閉じた唇を離した瞬間に出るのに対して，v は歯と唇の間を通る息によって持続的に出る音である．このため b は「破裂音」，b は「摩擦音」とも呼ばれる．したがって，b と v は音が瞬間的か持続的かで区別できる．

z とその類似音

日本人には同じに聞こえ，実際の場面ではそれほど問題にはならないが，英語としては区別するべき音がいくつかある．size [saiz] ⟨寸法⟩ と sides [saidz] ⟨side の複数⟩ はカタカナでは共にサイズであるが，size の [z] は「摩擦音」であり，歯の間からズーという音が継続的に出るのに対して，sides の [dz] は「破裂音」であり，上歯の裏側に付けた舌を離した一瞬に出るズッという音である．すなわち，音が持続的か瞬間的かで区別される．

同じ関係が vision [viʒən] のジョと John [ʤɔn] のジョにもいえる．ʒ は舌先をどこにも付けずにジューという音を継続的に出す摩擦音であるが，ʤは舌を丸めて上口蓋に押し付けていたのを離した瞬間に出るジュッという破裂音である．

(注9)：[ɔ] と [ɔ:] は長さだけでなく響きも多少違う．しかし，それを区別する必要はなく，日本人はこの場合に限り，[ɔ:] は [ɔ] を単に伸ばせばよい．それよりも，これらを [o] や [ou] と区別することが肝心である．

(注10)：厳密には l に「明るい l」と「暗い l」がある．後者は fill, pill, till など語末に来る l で，口の奥で発音するのでこれらはフィオ，ピオ，ティオのように聞こえる．米国の 5 セント銅貨 nickel [nikl] は日本語のネコと同じに聞こえる（[i] は広いイ）．

これらの音は，区別ができなくても意味の取り違えが起こることはまれであり，できなくてもそれほど気にしなくてもよい．

h の 発 音

ハ，フ，ホの h の音は日本人には問題ないが，ヒ，例えば he [hi:] の h の音は注意が必要である．日本人のほとんどが意識していないが，日本語のヒの子音はハ，フ，ホの子音と異なっている．ハ，フ，ホの h はただ息が出るだけであるが，ヒは息が口の中で振動して出る摩擦音である．これはドイツ語の Ich のイッヒのヒであり，子音としては h ではない（[x] という発音記号を用いる辞書もある）．

だから日本人が he, hill, heat などを発音するときは意識して，息を弱めて澄み切った音を出すよう心がけるとよい．もちろん日本語式に発音しても意味が取り違えられることはないが（むしろ [i] と [i:] の区別が重要），ネイティブが聞くと，汚い雑音に聞こえる．

y の 発 音

日本語ではヤヰユヱヨのヰ，ヱはイ，エと同一視されるが，英語としては異なる音である．例えば year [jiə] ⟨年⟩はユを発音するように口の中を狭めてから発音するが，ear [iə] ⟨耳⟩は口の中が広いままなので響きが違う（Happy New Ear!と挨拶しないように(注11)）．ただし，混同が起こる例は少数であり，相手も文脈で判断してくれるからそれほど神経質になる必要はない．

3.3 二重母音

二重母音は一つの母音が連続的に変化して別の響きで終わる．これは 1 音節であり，連続した二つの母音ではない．しかし表記の都合上，二つの記号を並べる．これには [ai], [au], [iə], [uə], [ei], [ɔi], [ou] の 7 個がある．

しかし，二つの記号が並んでいるので，多くの日本人にはこれらを二つの母音と誤解している．特に日本語のアクセント移動の規則を適用して，2 音節に分解して最初の音を低く，次の音を高くする癖がある．例えば highschool [háisku:l] は ハ|イ|スクール となりがちである．high [hai] は 1 音節であり，高く強いアの音が連続的に低い弱い音に変化し，イ響きが残る．日本人は high 単独では 1 音節として発音できるのに，後に school がつくと high を 2 音節に分解して抑揚を変えてしまう．

3.4 語末の s

語末の s が発音できない日本人がかなりいる．例えば犬の複数は dogs [dɔgz] で，本人もそう言っているつもりなのに dog としか聞こえない．人に聞いてもらって確認するとよい．

s が聞こえない原因は，高音から低音に下げながら [dɔg] を発音するので，[g] が非常に低音になり，それに子音 [z] をつけようとするからである．一方, fox [fɔks] のように無声子音で終わる場合は日本人でも [ks] がちゃんと言える．これは [k] が息だけであり，声を伴わないため [k] が低音にならないからである．

dogs を正しく言うには，[ɔ] の音を高音から瞬間的に下げ，直ちに反発させ，[g] を言うときは高音にする．そうすれば [z] を付けるのに問題はない．この下げた音を瞬間的に元に戻す要領はネイティブの発音をよく聞けばマスターできる．この反発がないと音が低いままになり，日本語アクセントの要領で二重母音を分割して高い音に戻す日本式処置がとられてしまう．

4. 最 後 に

国際学会で最も重要なことは，**決して原稿を読まない**ことである．これは昔から言われていることであるが，それでも原稿を読む人が絶えないのは，読まなければ言うことに詰まってしまう，言い間違えが起こる，という恐怖心からであろう．それは理解できる．しかし，原稿を読んで何の解決にもならないどころか，かえってマイナスである．

原稿が文章として正しく書いてあるなら，それを配布して聴衆に読ませれば問題ないが，本人が読むと，まず人が聞いて理解できない．私も原稿を読んでいる発表を聞いて理解できないことを何度も経験した．正しい英語ならどんなに速く話されても理解できるが，発音の誤りや日本式の不自然な抑揚があれば，速く読まれると理解できない．理解できる限界速度はその発声，発音のよさで決まる．

原稿を読む人は他人（ネイティブも）の英語能力を過信している．英語を読んでいるのだから，英語がわかる人はわかるはずだと思い込んでいるが，正しく読めるくらいなら原稿がなくても話せるはずだ．話せないなら必ず英語の発音に問題がある．だからある速度以上では理解不可能となる．

一方，原稿なしで話すと，どんなに途切れ途切れでも，どんなに発音が悪くても，表現に誤りがあっても理解できる．言葉とその人の思考速度が一致しているので，その思考が聴衆に伝わってくる．それを読み上げられると，たぶんこういうことを言いたいのだろうという解釈が追いつかず，何もわからないうちに終わってしまう．聴衆が馬鹿にされたようで非常に腹立たしく，反感を持つ．もちろん研究も評価されず，大変なマイナスである．

それに対して，どんなに英語が下手でも原稿なしでがんばれば非常に効果的であり，プラスの評価となる．ともかく努力して場数を踏むことである．それが必ず将来の進歩につながる．ぜひがんばってほしい．

(注11)：年賀状に A Happy New Year!のように A をつける人が多いが，これは誤りである．“正月の挨拶” は Happy New Year! である．ただし「文章中の名詞」としては冠詞 a が要る．だから事前に (I wish you) Merry Christmas and a Happy New Year. と書いたりする（これが a が要るという迷信の種らしい）．